



## トピックス

- 有機農業栽培体系の分類と特徴（その1）
- 「平成20年度 第1回参入促進検討会議」を開催
- 有機農業参入促進分科会「私も有機農業で生きたい！」開催

[www.ofrc.net](http://www.ofrc.net)

特定非営利活動法人  
有機農業技術会議 事務局  
発行責任者：藤田 正雄

## 有機農業栽培体系の分類と特徴（その1） 西村 和雄（有機農業技術会議代表）

### 有機農産物はピンからキリまで

ほとんど栄養分さえ投与していないのに、結構な量の農産物を生産している農家がいる。そういった事例の分析を重ねるにつれて、有機農産物の品質・姿形に、様々な違いが見られることに気がついた。姿形だけではなく食味や調理性といった、食べる行為にまで相当な影響がある。そして、このような現象のすべてが有機農業の生産方法に由来していることが、顕著になってきた。そこで、簡単ではあるが有機農業を、生産方法との関連を考慮しながらいくつかの類型に区分した方がよいのでは、あるいは区分しないと本当の意味での有機農業がなおざりにされるのではないだろうか、あるいは不安にも駆られ本論文を書くことにした。

### 有機農業を始めると

農薬や化学肥料を止めた瞬間から、ほとんどの方が有機農業を実践している、いやしているはずだと自負しているようである。ところがここで不思議な現象に出あうことになる。大部分の有機農業実践者は、農薬や化学肥料を止めた瞬間からそれらの代替物を考えがちである。つまり、農薬の代替物を使用しないことには病害虫を抑止できないと考えてしまう。あるいは化学肥料の代替物として収量に直接効果を見ることが出来る、窒素の多い畜糞を使用しがちである。

ところが、代替物を使用し続けていると、必ずと言っていいほど病害虫に出会うことになる。しかも現代農業のために育種された多収品種を使用すると、それは耐肥性品種であることが多く、養分を投与しないことには収量が期待できないのである。

畜糞を多用する理由がここにある。また別の理由か

らも畜糞を多用する例がでてくる。それは、特に新規就農者の場合、面積が小さいこともあって（大部分が借地）、農地からの現金収入が少ないため養鶏をする場合がよく見られる。ところが有蓄複合経営とは名ばかりで、養鶏規模が農地に比べて不適切に大きいうえに、鶏糞すべてを農地に投与する例がある。それが結果として硝酸態窒素の過剰を来し、えぐい・苦い・まずいなどといった苦情を受けることになる。当然、窒素過剰の葉色は黒ずんだ色を呈する。

### 準有機農業（資材依存型）

上記のごとく投与資材を多用するのは、現代農業時代の癖が抜けきらないためである。資材をいろいろ使わないと作物収量は期待できないし、病虫害に遭いやすいからだと言う。

農薬の代替物としてニームオイル・ストチュウ・BT剤をはじめとする生物農薬や天然生理活性有機物を使用したがる。しかも、化学肥料の代替物としての窒素・リン・カリの量を気にし、天然鉱物としての硫酸マグネシウム（キーゼライト）やカルシウム資材・微量元素などを簡易土壌分析の結果からと称してドカドカ入れたがる。

この段階は何ら現代農業と代わりはない。単に代替物を使用して満足しているだけにすぎない。たとえ使用資材が天然化合物に変わったからといって、それだけで有機農業を実践しているとはとうてい思えない。しかし、多く見受けられる現象である。

それゆえに、準有機農業と名付けたのである。資材依存型あるいは、多投与型有機農業と言ってもいい。結果的に資材に依存して、それがなければ収量は得られないと考えている。（その2へつづく）

## 「平成20年度 第1回参入促進検討会議」を開催

6月14日に、東京さぬき倶楽部（東京都港区）にて平成20年度有機農業推進団体支援事業（参入促進事業）の参入促進検討会議を開催した。実施計画と成果目標の承認と、技術や販路開拓など有機農業への参入の隘

路、消費者への啓蒙の大切さなどが議論された。全国有機農業推進協議会が受託した普及啓発事業との連携の大切さが強調された。

## 有機農業参入促進分科会「私も有機農業で生きたい！」開催

6月29日に東京産経プラザにて行われた、“食・農・環境の未来を「ゆうきの一歩」から”（主催：NPO法人全国有機農業推進協議会 共催：NPO法人有機農業技術会議）において、有機農業への参入促進のための分科会「私も有機農業で生きたい！」をもった。（他には若者、食育、流通のテーマで分科会があった。）

この分科会では、新規参入、そして慣行からの転換参入で有機農業を始めたいという思いを形にするにはどうしたらいいのか、参入を希望する人たち、それを支援する人たちの話を伺いつつ考え、会場からの質問にも応えていった。参加者は70名であった。ここでは発表された参入例を紹介する。

**転換参入例：千葉孝志さん**（宮城県大崎市の生産者 稲全面積を慣行栽培から有機栽培へ切り換え）

農家は、自分で作ったものを農協に頼らずに自分の手で売らなければいけないと考えている。自分でライスセンターを立ち上げて売り先を探したとき、どのようなものを市場や流通が求めるか、消費者団体の要望を聞いて取り組んだ。最初は除草剤1回、JAS有機以後はできる人から無農薬での要望に応じていて全面積を切り換え、現在約6割の田んぼでJAS有機を申請、その他は県の認証を取得している。地域の田は水を循環させているため、無農薬に取り組むなら地域全体で取り組む必要があった。仲間60名のうち有機は5名、約200haのうち有機が25ha、175haは除草剤1回。グループ最大のテーマは、いかにして環境が再生できるような米作りをするかということ。

有機であれども食味で差別化できるようないいものを作っていないと、なかなか消費されていかないのが現状。きちんとした覚悟と目標を持ってやるべきだと思っている。

**新規参入例：室住圭一さん**（千葉県東金市の生産者 10年前に有機農業で新規参入）

新規参入して約10年になる。20代前半まで全く農業

に関係のない生活を過ごした後、国際協力を決意。そのための技術として農業研修を受ける。タイで約1年活動した後、千葉県東金市で農繁期の住み込みでアルバイトから農業に取り組みはじめた。毎年順調に面積を増やし、現在は水田3ha弱、畑が60a。ほとんどが消費者との直接取引なのでJAS有機認証は取得していない。食べていける状態になっているが、いきなり大きくなかったのがよかったのではと思っている。自分の体験から新規就農に必要と思われる事柄をまとめたのが、次の5か条。

1. 初年度から規模は大きくしない
2. 収入の不足は農家バイトなどで補う
3. 借金をしてまで設備投資しない
4. 周りに新規就農者がいたら積極的に交流する
5. 力がついてきたら少しずつ規模拡大をしていく

有機農業は、生産だけではなくそれをとりまくライフスタイルだと思っている。流通させずに自分の自給自足分だけを作るのでも構わない。いろいろな人とのネットワークの中で野菜や米を譲っていただくというような有機的な人間関係をまず築くのが大事なことで、生産者になるかどうかはその後の問題と考えている。



分科会風景

### 賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同してくださる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

#### NPO法人

有機農業技術会議事務局

〒390-1401

長野県東筑摩郡波田町5632

（財）自然農法国際研究

開発センター

農業試験場内

FAX:0263-92-6808

E-mail: office@ofrc.net

Website: www.ofrc.net